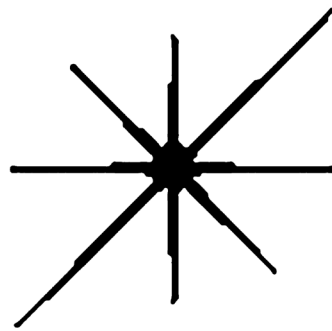


コメット通信 4

[特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

いまこそ《人間》に過激に問いかける

——コロナの時代を生き延びる Philosophical Dialogue (1)

小林康夫×星野太

本稿は、『《人間》への過激な問いかけ——煉獄のフランス現代哲学(上)』(2020年9月, 小社刊)の刊行を記念して、10月9日(金)、六本木ヒルズ森タワー49階の「アカデミーヒルズ」において開催された、小林康夫先生と星野太先生によるオンラインイベント「いまこそ《人間》に過激に問いかける——コロナの時代を生き延びる Philosophical Dialogue (1)」の記録に、両先生に加筆・訂正を加えていただいたものである。

当日は、会場での小林先生と星野先生の対面での対話の様子がYouTubeからLive配信され、参加者は300名近くに上った。イベント終了後には、両先生と参加者の懇親会がzoomミーティングにて開催され、30分の間にさまざまな質問が飛び交った。ただし、このzoomミーティングの様子は本稿には含まれていない。

(編集部)

城所康予 皆さん大変お待たせいたしました。ただいまより「いまこそ《人間》に過激に問いかける——コロナの時代を生き延びる Philosophical Dialogue (1)」を開催致します。本日はご参加下さいますと誠にありがとうございます。今回のセミナーには300名近くの皆様からお申し込みをいただきました。また、お申し込みの際にお願い致しましたアンケートにもたくさんのご意見をお寄せいただき、とてもうれしく思っております。本日全てを扱うことは時間の関係上難しいのですが、セミナーの後半でいくつか取り上げてお話しいただく予定です。冒頭に少しお時間をいただきまして、私からアカデミーヒルズの紹介をさせていただきます。アカデミーヒルズは、六本木ヒルズの49階にございます会員制のライブラリです。365日開館している自習スペースの他に、今回のようなイベントやメンバー同士の交流会も開催しております。毎月さまざまなテーマでの学びや出会いの場を提供しており、スケジュールや参加方法は公式サイトとメルマガにてご案内しておりますので、ぜひご確認いただければと思います。それでは本日のセミナーを開始させていただきます。本日の講師は東京大学名誉教授の小林康夫先生、そして早稲田大学社会科学総合学院専任講師の星野太先生です。それでは、両先生、どうぞよろしく願いいたします。

*

小林康夫 これから、ここアカデミーヒルズで3回にわけて、こういうセミナーというか、対面のトークをやろうと思っています。今日が最初の「実験」です。実験がなるべくうまくいくように、私の昔の学生でもあり、長年いっしょに東京大学でUTCP (University of Tokyo Center for Philosophy) を運営してくださり、いっしょに海外のいろんな哲学者を訪ねて研究交流をした星野太さんに来ていただきました。最初はあまり「対決」にならない感じでやれるかなって思っているのです。星野さんに言葉を返す前に、私は星野さんの修士論文なども審査しているし、長い付き合い、長い共通の経験があるのですが、先生と弟子という感じで話をするとみなさんはおもしろくないだろうと思いますので、今回それは置いておくことにしましょう。

われわれ2人の間の、何かズレというか違うところ、同じフランス現代哲学を学び、勉強し、それ

に付き合ってきていながら違うところ——星野さんは1983年生まれでしたね、私は1950年生まれですから、ほとんど四半世紀のズレがあるわけですが、この四半世紀のズレも含めて——同じようにフランス現代哲学と付き合っているながら、あぶり出されてくる違い、いったい何が違うのか、どこが違うのか、そもそも違いがあるのか。そういうことが面白いかなと思っています。今日は、もちろん最近出た私の本『《人間》への過激な問いかけ』を一応テーマにはしているのですが、できれば、この新型コロナ時代という人類の転換期の時期を、星野さんの世代はどう生きるのか。私の世代はどう受けとめるのかといったようなこと、そこにズレが出てくるのかこないのか。出てくるとすれば、そのズレが希望になるのかならないのか？ といったようなことを話し合いたいな、と思っていますが、星野さんはどんな感じでしょうか。

星野太 本日は声をかけていただき、ありがとうございます。こうして小林先生と2人で公の場でお話しするのは、おそらく初めてだと思うんです。とりわけ、最近先生が水声社から出された『《人間》への過激な問いかけ』——サブタイトルが非常にかっこよくて、「煉獄のフランス現代哲学」というのですが——を読みながら、私が特に話したいなと思ったのがジャン＝フランソワ・リオタールのことでした。リオタールは、小林先生にとっては先生にあたる人であり、私にとっては修士論文の対象である、つまり研究対象として出会った哲学者ですが、ある意味、私は小林先生を媒介として、その孫弟子と言えなくもない。ただ、やはり小林先生が見ていらっしゃる人間としてのリオタールと、私が研究対象として考えてきたリオタール——私が大学に入ったのはリオタールが亡くなった後です——とはかなり違いがあるはずで、そういうズレも含めて話せればと考えています。

あともうひとつ、今日のトークのタイトルにも入っているコロナについては、おそらく世代差もあって、けっこう受け止め方が違うような気がしています。

小林 それではまず、タイトルにも含まれているその新型コロナの話をしてしましましょうか。どのあたりが違う感じがしますか。

星野 導入なので、まずは普通の話をするようになりますが、三つ論点をあげてみます。

第一に、私が教えている早稲田の学生たちによく言っているのは、いま自分が直面している状況、それから自分の国の政府がどういう対応をとっているかをよく見て、よく考えておかなければならないということです。私は、今のコロナをめぐる状況は、おそらく初めての世界的な状況だと思っています。20世紀に起こった二度の世界大戦も、世界大戦と言ってはいますが、実は世界の一部の地域で起こったことであって、本当の意味でグローバルな出来事ではなかった。いま地球上を覆っているコロナ・ウイルスこそ、文字通り、有史以来初めてのグローバルな出来事なのではないでしょうか。学生たちはこれから何十年も生きていくわけですから、今後、海外の友人ができたときそのことは絶対に話題になる。そのとき、あなたがどういうことを考えていたのか、どういう状況で生きていたのかということが言えないと、絶対に恥ずかしい。だからそういうことをよく考えておくように、と言っているんです。いま私がかかっている現代思想の授業では、そういうことを若い学生たちに言っています。

それから第二に、これは今から10年近く前のことになりますが、震災直後の状況をよく思い出します。というのは、このコロナの受け止め方が、やはり人によってかなり違うからです。リモートワークになって通勤のストレスから解放されたという人もいれば、仕事を失ったり、家庭の中で窮屈な思いをしている人たちもいます。みな、同じ出来事を違う仕方で経験している。だから、震災の後で、特に原発をめぐるって起こったように、どれくらいそれを恐れるかということも含めて、分断を感じるということがあります。

もうひとつ、第三の論点ですが、私も先の外出自粛期間は基本的にずっと家にこもっていました。

ようやく最近外に出はじめて痛感するんですが、身体性がかなり希薄になっていると感じます。具体的には人によくぶつかりそうになるということなんですが、他人と接触する時間が著しく少なくなったせいで、みな自分の身体感覚を失っているんじゃないかと思うんです。これはけっこう根深い問題だと思っていて、コロナが落ち着いても、どこか元に戻らないのではないかと。たとえば精神科医の齋藤環さんが「コロナ・ピューリタニズム」という言い方をしていますが、身体的な接触を忌避していたこの1、2年の感覚がその後も残り続けて、何か人間の身体性に取り返しのつかない変容が起こっていくんじゃないかということを考えますね。だいたいこの三点です。

小林 星野さんは、私の受け止め方は違うんじゃないかなって予想している？

星野 今の三つの点についてはそれほど違いはないと思うのですが、ただやはり感染した時のリスクのことを考えると、年齢の問題が……

小林 私は70歳ですからね……

星野 ですから、自分がかかったときにどうしようという感じは、小林先生のほうが切迫感があるのではないのでしょうか。

小林 それは全然ない。個人的にはね。不思議とかかるかもしれないという切迫感はあまりなかったですね。この春で青山学院大学を辞めて「失業者」になって授業しなくてもよくなったし、外に出て行かなくてもいい。そうなる、かえてこの際、毎日歩こうかなって近所を散歩したりして、自分の身体性を取り戻した、みたいな感じ、逆にね。ようやく毎日散歩できているな、という感じがしてきたくらいで、むしろ「日常」を取り戻したというか。

でも星野さんが今提起した三つのポイントに関してですが、同じように、コロナという災厄ないしディザスターを私がどう見ているのかというと、もちろん世界史的な事件と思うんですが、パンデミックだから世界史的な事件というわけではなく——パンデミックなら以前にもあったわけですから——、決定的なのは最後に出てきた「三密」回避ではないのでしょうか。この三密回避が何かというと、感覚的に言えば——こう言ってよければ——、19世紀後半のパリでとても美しく花開いた、いわゆるブルジョワ・モダン文化が否定されたということ。三密文化とは、たとえばマネやドガやロートレックなどの西洋美術の絵を見ればすぐに分かりますけど、キャバレーができて、ダンスホールができて、みんなが乾杯してダンスを踊りながら、たがいに密に接触して、欲望を発散して、会食をしてという文化。外でだって園遊会とか海水浴とかがあり、そういう欲望に基づく都会的「密」が文化の根底にあったわけですね。そこでバレエをやり、演劇をやり、オペラをやり、コンサートをやりますという、みんなが集まって、人間の裸の欲望がぶつかりあうことで、これまでにないすごい文化が生まれてきた。人類始まって以来の強烈な「密文化」ですね。これに初めてですが——道徳的にどうかというわけではなくて（またいわゆる戦争状態でもないのに）——その「密」をある種、否定しなくてはならないような動きが世界的にでてきた。

そういう意味では、後で話題になるリオタール先生は「ポスト・モダン」と言ったけれど、もはや単なる「ポスト」じゃなくて、モダンという文化そのものの根幹が今、問い直されている。それが「距離」に晒されている。さらに言えば、陶酔もあれば音楽的なエクスタシーもある、肉体と肉体がほとんどぶつかるような官能的な「三密文化」が——「それはいけませんよ」という文化的な、倫理的な理由ではなくて、「それをやっていると滅びますからやめましょうね」という、全く違う外部からのインパクトという強制によって——問い直される。しかも、自分でそれを、「自粛」としてやらなくてははいけない。もちろん政府が命じるわけだけど、「君の健康に悪いから、他人といっしょに食事してはいけませんよ」と言われるわけです。「戦争に行け！」というのとは全く違う命令。その意味

では、とても鮮やかな、華々しい華麗な文化の根底が、まったく文化的ではない理由で、否定されるというような事態かな。

しかも、「密をやめなければあなた方は滅びますよ」、と言われると同時に、「できるでしょう、なぜなら今は情報ネットワークがありますからね、それが全部補います」と言われるわけです。「密はいけません。リモートでいきましょう。オンラインでいきましょう。みんな離れたままでよろしいんですよ。なぜならテクノロジーが補償しますからね。今、世界は、地球は全部インターネットで覆われていますから、皆さん、そこに接続さえしていれば、密になる必要はありませんよ」と言われる。今回のコロナがどのくらい大きな転換期になるのか、もう一回、「やっぱりみんなで集まってお酒もいいよね」という方向に戻ってくるのかは分かりません。だけど、インターネットとか情報システムとかのことを考えたら、これは間違いなくまったく新しい文化、つまり今までの19世紀の首都パリに開花したようなブルジョワ・モダン文化とはまったく違う文化に人類が移行しつつあることを明確にしめす出来事だと受けとめています。

星野 私と同じようなイメージなんですけど、少し違う角度から、それは「都市」の経験であったと言いかえてもいいと思うんです。ボードレールの都市をぶらぶらして、何かにばったり出会う、そして、そこで何かが始まるということが、完全になくなることはないけれど、かなり困難になるんじゃないか。インターネットがコミュニケーションを保証するということになると、偶発的なことが起きにくくなる。まさにこの状況がそうなんですけど、セミナーや学会に行くということは、現地で古い知り合いにばったり会ったりとか、あるいは道中で不慮の事故に遭ったりとか、そういうアクシデントがつきものですよ。ただ、それはフィジカルな空間のなかだからこそ起こるのであって、ある場所に電子的にリモートで集まるという場合にそうした偶発的なことは起こりにくい。実際、物理的に身体を晒して街をぶらつき歩くということには無駄も多いわけですが、そういうことがもつ豊かさが縮小されてしまうイメージです。

小林 それは、星野さんから見た場合には、来るべき未来の姿としてポジティブにあらわれているの、それとも、どちらかというとなガティブにあらわれているの？ 私ははっきり言っておくと、19世紀パリに開花したこのブルジョワ文化に憧れがあるわけですよ。このブルジョワ市民文化が生み出したもの、演劇、オペラ、芸術、小説、その他へのすごいノスタルジー、過去へのノスタルジーがありますね。ある意味ではこの魅力に人生を賭けたわけなので、私は、最後までこのノスタルジーを生きるしかないのでは、というところも実はあるんです。星野さんは、私よりずっと若いわけだけど、この新しくはじまっている情報テクノロジー文化に、しいて言えば、希望みたいなものはあるの？

星野 私の場合はちょうど中間ぐらいですね。気持ちとしては先生側なんですけど、やはりこういうことをひとつのきっかけとして、首都圏で行われているトークに來られない地方の人が遠隔で聞けるようになるとか、身体に障害があっても出かけることが困難な人が自宅から見られるようになるとか、そういうことが技術的に可能になったことは喜ばしいと思います。ただ、やはりさきほど言ったような、実際に現場に行って、何か予想もしていなかったようなことが起きることがなくなってしまふのは、損失だと思います。それから同じく危惧しているのは、時間もお金も潤沢にある人ばかりが現場に来ていて、そうじゃない人たちがいるにもかかわらず、そういう人たちも遠隔で見られるからいいでしょうみたいなかたちで、何かそこに階層ができてしまうことです。だから、もちろんそれをポジティブに享受する人もいるとは思いますが、全体としてはやはり、なんとというか、そういう余剰の部分の切り落とされてしまうことに対してはネガティブな気持ちをもっています。

小林 でも、この動きが進んでいくことに関しては、これは仕方がない？

星野 避けられないでしょうね。

小林 やっぱり、このような情報システムに、今までと違った仕方で、人間の存在が依存するという状態がより強くなりますよね。その時に、すごく重大な問題が現れてくると思うのです。このトークにしても、今日はあえて私は星野さんと対面で行いたいと希望して、こういう形でやっていただいているわけですが、その対面の出来事をみなさんが——多くの方がいらっしやったださってありがたいんですけど——見てらっしゃる。星野さんと私がここにいる「いま、ここ」と、みなさんがご覧になっている画面の上の「いま、ここ」がどのようにつながっているのか分からないでしょう？ もちろんYouTube だというのは簡単ですけど。それが非常に重大な問題。誰がコントロールしていて、どうシステムで動いていて——それは電話と同じなのか？ ちがいますよね？——どういうふうな情報が伝わり、コントロールされ、操作されているのか分からないでしょう。それは、こうして星野さんと私がここにいって見合っ話している関係とは全然違う。「いま、ここ」を共有することなく、しかも「いま、ここ」の何か、情報としての「いま、ここ」はちゃんとそちらに、みなさんのところに行っている。システムのこの不透明な見えない部分、つながっているけど、でもそのつながりをコントロールしているものがあるのかいないのか。もしそれが「悪しき権力」だとしたら、当然、今すべてがコントロールされ、監視され、支配されていることになる。こういう事態において、原理的に見て、今までわれわれが常識的に考えていた人間関係の理解とは違うものがあるように思うのですね。非人間的ななにかがある。

それで、今日のテーマと関連させて言うと、コロナの問題は、つきつめれば、ある意味では、「人間とは何か」、「人間の存在はどういうことなのか」について、どうしてもある種のフィロソフィカルなりフレクシオンが必要な所にまで来ているのではないかと感じるんだけど、どう思います？

星野 私もプラグマティックな話として、この状況は、この場に300人いるのとはまったく違う状況だと思っています。かりにここに人がいるとすると、視線の向け方とか、手の動かし方とか、いろいろ考えますよね。でも、おそらく今この放送を聞いている人の多くは、何かしながら聞いていたりするのではないかと思います。画面を見ながら集中して聞いている人もいれば、その場を離れて音だけ聞いている人もいたり、みんな違うわけですよね。

小林 自宅でビールを飲んでいる人もいます。

星野 みんなそれぞれ違う。少なくとも言えるのは、音声だけで情報を伝えなければいけないという点ではラジオに近いわけですが、それは普段われわれが人前で自分の肉体を使って喋るのとはまったくモードが違うということですね。私もこういう状況になってから、何度かオンラインの対談をしていますし、授業でもやっていますが、対面とは全然違う。

来るべき人間ということであると、こうした情報環境が今後一般化していったときに、私たちが人間としてどう振る舞うべきか、というスタンダードが変わってくると思うんです。つまり、他人とのフィジカルな接触を第一に考えてきた従来の、「人間ってこういうものでしょう」という礼節のあり方があったとすると、それが変わってくるんじゃないか。こういう、オンラインでつながった状況でいかに行儀よく振る舞うかという、新しい礼節のあり方について考えなければいけない、そんなことにもなっていくんじゃないでしょうか。

小林 コロナ・ウイルスの「ウイルス的なもの」について、星野さんはどう受け止めています？ 私がコロナ問題を面白いと思っているのは、ウイルスに興味があるからです——もちろんディザスターには地震のそれとか、戦争のそれとか色々あるけど——、私はコロナ・ウイルスの哲学みたいなものがありうらと思っている。どうしてかという、ウイルスはナノ・スケールの非常に小さなもの。

この前ネットを見ていたら、ひとりの人間を地球の大きさだと仮定すると、普通の細菌は象の大きさで、ウイルスは鼠の大きさだと書いてあった。この小さなウイルスが増殖すると、あっという間に、その「地球1個」を倒すことができる。ウイルスは、生命としてはDNAかRNAの、どっちかひとつしかもってない。とにかく中途半端な存在で、だから人間をのっくらなくちゃいけない。で、のっくららのっくらで、自分を無限にコピーしなくてはならない。自分のコピーを作ることに限っては、生命の最も根源的なものを持っているわけです。ある意味では自分がないにもかかわらず、人間を侵略して自分を増やしていくみたいな。

「《人間》への過激な問いかけ」を今、この事態から出発してやろうとすると、この、ウイルスのあり方、これはひょっとしたら人間と似ていないかなと思うわけですね。つまり、ある種の「生命以前」の存在。人をのっくらないと、Hackしないと、ハッキングしないと、増殖しないそういう存在。でも、それは生命、「前－生命」、「生命以前の生命」。情報がある。情報があるから、その情報をコピーできる。増殖できる。で、しかも途中で変異して変わっていく。哲学者として、この存在のあり方そのものを「《人間》への過激な問いかけ」として受け止められないか。つまり、人間はコロナ的なのではないか？人間の存在はひょっとしたらコロナとそんなに違わないかもしれないということと、同時に、さっき言った地球規模のネットワークもある。これは情報でつながっている。だから、当然、ハッキングする者が出てきて、それがのっくられたら、とんでもないことも起こり得る。なにかをうまくコントロールしたら、隣国から原子爆弾が、ミサイルがとんでくることもありうるかもしれない。情報ネットワークとウイルスの、地球規模とナノ・スケールのこれら2つの情報網がそれぞれ他者をのっくらって自分を増殖させる構造の間に、じつはわれわれ人間があるという「過激な哲学」が出てくると思わないですか？（笑）

星野 それをあえて希望として読みかえるとすると、われわれがこのウイルスから学ぶべきことは、まさにウイルス的な弱い存在であっても、ネットワークを介した働きかけによって大きな体制——それは国家かもしれない——を転覆させる余地があるかもしれない、ということになりますね。

小林 そう言ってもいいと思う。誰でも、どんな人でも、ショートメールでもツイッターでも、何を使ってもいいのだけれど、この地球規模にひろがったネットワークに参入できる。もちろん、みんなが「いいね」してくれないと広まらないんだけど、うまくいけばバーっと広がって一種のオピニオンを作っていく。今、それが世界中で起こっているわけじゃないですか。あちこちで民衆的な、ポピュリズム的な動きが起こっている。ベースにはそういう問題があるからこそ、政治的な状況とウイルス的な状況と、スケールは全然違うんだけど、呼応しあうものがあるんじゃないか。こうした全体が、現在の世界史的な転換を提示していると思っているんです。

星野 そういう意味では、今回の新型コロナ・ウイルス流行のタイミングは、皮肉なところがあると思います。いま先生がおっしゃった、SNSみたいなものを媒介として国家体制を転覆するといったようなことは、ちょっと前の「アラブの春」を連想させるところがありますね。ただ、あれは最終的にそこまで成就しなかったというか、部分的に成功したところがあるにせよ、ウイルス的な戦略というものは最終的な体制の転覆には至らない、というのがこの数年の雰囲気だったと思うんですよ。そして、そのタイミングでこういうウイルスが蔓延して、結果的に国家権力は再び力を強めている。

実は『《人間》への過激な問いかけ』のなかに、30年ほど前に先生がフランス現代哲学について書かれた文章が入っているんですが、先生はそこで、国家はその力をどんどん弱めていく、つまりグローバルな経済システムが一元化していった、従来の国民国家はその役割をどんどん縮小していく、ということを書かれていました。そういう見通しは実際ある時期までは共有されていたと思うんですが、

ここ最近、とりわけ今回のコロナと、それに連動したナショナリズムのなかで、むしろ国民国家が回帰してきてしまったような気がしています。だから、実際の政治の現場を見ると、ウイルス的なネットワークを使った動きが一段落し、その後でコロナ・ウイルスが出てきた。そして政治的には国家権力が再び力を強めている、という皮肉な状況があると思います。

小林 そう言われて、確かにそうだなあ、と思いますね。つまり、一方では、国家も資本主義を動かすエージェントのひとつになってしまうんじゃないか。これまでは国家が一番上にあっただけでも、それが資本主義全体のシステムのひとつに組み込まれてしまう可能性があると言っていたわけで、それは部分的には事実だと思うけど、同時に、そうした中で——私に未来の展望をふきこんでいるというか、私がシンパシーを持っているということですが——やっぱりヨーロッパ、欧州共同体の問題があると思うんです。やっぱり国家を超える動きが具体的にヨーロッパで出てきたということ、国家が超えられる可能性があるということ、そこに希望が見えたわけです。

ところが、近年、Brexitということが起こって、まさにヨーロッパ＝欧州共同体そのものが崩壊しはじめた。私の個人的パースペクティブに関して言えば、ヨーロッパにおけるこのBrexitの問題は大きいね。ここで、私がある意味で「希望」を感じていた、ヨーロッパ的なもの、西歐的なものの一種の内部崩壊が起こっていくのを目の当たりにしたわけです。星野さんが言ったように、国家という単位になった場合には必ず、国家の間の闘争や戦争の状態になり、なおかつ国家の中でも激しい弾圧があり、闘争が起こる。もう1回、すべてが統合の方向ではなく、闘争の方向になる。それは感じますね。

確かに、私も、今度の本の中で、フランス哲学の「《人間》への過激な問いかけ」ということに共感しているわけで、常に《人間》を中心において《人間》という概念そのものを問いかけて変えていきながら、新しいリアリティーを作っていくという動きにある種の憧れを持っていたのだけど、それが行き詰まって、袋小路に入ってしまった感じですね。

その理由のひとつは、さっき言ったような情報テクノロジーが地球を覆うこととか、環境の問題とかもあるかもしれない。情報テクノロジーみたいなものが、民衆の、人々の非常に強い情動をかき立てる、つまりますます広がる格差に対する根本的なルサンチマンを醸し出す装置になるというか、まさにそうした情動を養分・エネルギーにして強大になり、もう一度国家が国家主義の方に傾いてくるという構図になっていますよね。これはイデオロギーの対立ということではない。イデオの支配している思想の対立ではなくて、ある意味では人間の意識のレベルを超えたもの、違うものによって、人間が統御されている。人間もまたそれをのっって利用している。下の方にはウイルスがあり、上の方には情報があるという感覚というのはそういうことです。

星野 そうですね。私はある意味、国家が別の次元で資本主義をとり込んだような気がしているんです。資本主義というのは、言うまでもなく差異を生産するシステムですよ。差異を生産してそこから生み出された価値を利益に変えていく。さきほど先生がおっしゃったことですが、政治もイデオロギーの対立ではもはやなく、上にはこういう人たちがいて、下にはこういう人たちがいるというルサンチマンしかない。じぶんが置かれている位置と格差が否応なく見えてきてしまって、差異の産出が至るところで無限に起こっている。

イデオロギーの対立だったら、ふたつの均衡する力がぶつかっているわけですけど、今われわれを取り囲む情報環境のなかで起こっていることは、常に差異が生み出されて、その差異の落差をエネルギーにする仕組みです。つまり、巨大な内戦が起こっている。国家が最終的にそれをうまくコントロールできているのかどうかは分かりませんが、それを部分的に利用するかたちで、資本主義的なモデルを取り込んだ支配になっているという言い方はできないでしょうか。

小林 星野さんが言う〈差異〉というのはどういう意味？

星野 本来、資本主義において産出される差異というのは、貨幣価値という意味でのバリューですが、それをもう少しミクロに考えてみると、自分と他人の違いとか、置かれている状況の差異も含めうるのではないのでしょうか。そういったものがますます可視化されている状況のなかで、いたるところで内戦が起こっているというイメージです。

小林 内戦ですか。内戦というと、差異がまとまっちゃっていませんか。A vs B というように。

星野 それはなんというか、まとまっていない内戦というイメージですね。

小林 うん。いやあ、難しいね。カオスですね。

城所 せっかくなので、小林先生の今回の本の話も、皆さん、お聞きになりたいんじゃないかと思えますので、そちらに少し話題を変えていただけたらいかがでしょうか。

星野 そうしましょう。この本（『人間』への過激な問いかけ）は、小林先生が新たに書きおろしたパートと、過去に書かれたパートが組み合わせられて一冊の本になっています。過去に書かれたものにはほぼ必ず日付が入っているのですが、私はその日付をまじまじと見ながら読んでいました。

そのなかで、小林先生がちょうどフランスから帰国された頃に書かれた、フランス現代哲学とはこういうものである、という総まとめのようなテキストが冒頭にきています。今日、小林先生からは何か二人の「違い」が見えるようなことを話してほしいと言われていたのですが、あまり異論がない（笑）。1980年代に書かれているにもかかわらず、いま読んでも、フランス現代哲学とはこういうものだ、というのが凄くよく分かる文章です。それにくわえて、小林先生が直接交流のあったリオタールとか、フーコーの来日のこととか、そういう歴史的なことにも触れられていて、率直に言ってすごく面白いというのがありますね。

なおかつ、ふだんあまりフランス現代哲学に接していない方に向けてお話しすると、20世紀のフランス哲学において「人間」の問題が問われていたということは、かならずしも自明のことではないと思うんですよ。構造とか、構造と主体のせめぎあいみたいなことはよく言われてきましたけど、それを「人間への過激な問いかけ」とはっきり言った人はあまりいないと思います。フーコーの『言葉と物』の最後のフレーズなどは有名ですが、やはり「人間」という問題をフランス現代哲学の核心的な問題として取り出した類書はあまりないのではないかと私は思っています。しかもそれを、80年代にすでにキーワードとして出されていたことが印象的でした。

小林 この本の中で「人間」という言葉は何回か出てきますけど、それは、現象学者モーリス・メルロ＝ポンティの哲学を解説した『人間の尺度』というティリエットの本のタイトルにすごく影響されています。どれだけ構造が問題になっても、どれだけ構造そのものを解体するような動きが問題になっても、フランスの哲学には、ラディカルな「人間についての問いかけ」がずっとあるなということを感じていて、私にとってはそれが魅力だったんですね。そう言うことはどういうことかという、戦後の思想——もちろんフランス哲学以外にも、分析哲学系とかいろんな哲学があるわけだけ——は、やっぱりフランスの実存主義、サルトル、メルロ＝ポンティといった実存主義＝現象学からはじまって、それが構造主義によって転倒され、変動する、フーコーやリオタールやデリダによってある意味ではひっくり返される。だけど、根源的な「人間への問いかけ」そのものはずっとあったということかな。

つまり、簡単に言えば、人間にとっての「意味」とは何か。「人間」と言ってもいいし、「私」って言ってもいい。私ここに存在しているということの「意味」は何なのか。実存主義や現象学は、私が今世界をここから見ている、ここだ、ここからすべてが出てくる、という考え方をしたけど、それ

はブルジョワの密文化と同じで、私からすべてがはじまる、私にすべての意味があるということ。これまで、人間はそんなことは一度も考えたことはなかった。かならず、「君の存在の意味はこれだよ」と社会や「神」が決めていた。

その意味がある意味では自分のものになったんだけど、でも、そうじゃないよねと気がついてしまうわけですね。人間の意味を——私の存在の意味を、私は自分で見出せるのか、それともある意味では、言語がある以上、すでになににほどか決定されているのではないか、どうなんだ？ という問いが激しく問われたわけです。じつは、哲学というのは正解をぼんと出すことではないんですね、せめぎあいの場所に身を置いて問いかけをすることが大事なんだ。その問いかけをちゃんと問いかけなくてはいけない。問いかけることは、「人間の意味ってなんでしょね？」とただ聞けばいいというわけではない、そんなことは哲学でもなんでもない。「人間の意味ってどうなんだろう？」と問いかけることは、どういうふうにして、どういう手順を踏んで、なにを、どう思考し、言っていかなければならないか、を繋げていくことなんだ。その繋げ方に関して、「フランス現代哲学」はさまざまなヴァリエーションを作った。そこにこそ私の「フランス現代哲学」への熱い思い、今だに少しも変わらない思いがあるんですね。

星野 それでお聞きしたいと思っていたことがあるんですが、かつてサルトルに代表されるような実存主義があって……

小林 そこには自分を自分の意味へと投企するというハイデガー的なものもありますよね。

星野 その後、構造主義と呼ばれるような、むしろそのまわりにある構造のほうが主体である「私」のあり方を規定している、という言説が流行した時代もありましたよね。そうなるとう当然、もう一度実存に戻ってくる。小林先生自身も、10年ほど前から、あらためて実存を問うという態度を取られていますし、最近だとマルクス・ガブリエルも「新実存主義」ということを言っています。

小林 そうですか。私は超実存主義なんです。「新」じゃないんです。

星野 超実存というのは、なんとなくイメージとしては分かります。実存主義において問われていたような意味での人間とは違う、それを超えて、それをさらに問うような意味での「sur (超)」というのは分かります。ただ、もう少しそれを言葉にすると、どういう問いがそこにあるのかということをお聞きしたいのですが。

小林 簡単には言えないけど、どこかで、星野さんたちの出発点であるメイヤサーの哲学とつながってるところがある。自分が意味を賭ける、自分で何かに賭けることによって、「私の人生はこういう意味だ」、「私は平和のために生きる」、「あの人のために生きる」というように考える仕方。だけど、こういう自分による意味づけじゃなくて、「君が生きるということは歴史の中でもう決定されているよ」という意味づけ方もあった。では、このふたつの間をどう具体的に生きるのかというときに、例えば、目的論的な意味に依らないで、「強度だ」「生きる激しさだ」という方向もあって、私はどちらかというところらに自分をつないだ。自分で意味を決定して意味づけることに自足するわけでもなく、かといって、一方的に意味が決定されているからしょうがないね、と諦めるのでもなく、自分の実存を一種の、意味に依らない強度で維持する。これが私、小林康夫だと今だから分かる、昔は分からなかった、こういう本を書いてみてはじめて分かることだけど、私はそうやってリオタール先生のところらに会いに行ったり、いろんな人に会うことになった。

「激しい」ということは暴力的になることではない、普通の人だったらやらないようなことをあえて自分のためにする。制度上の先生ではないのにリオタール先生に会いに行く、先生のもとで学びますって接近する。その時に、自分が賭けられる。賭けるということに関しては、実存的なんです。だけど、

賭けたものが自分に意味があるかどうかは分からない。意味があるから賭けるんじゃないで、断崖から飛び込むみたいに出会っていく。そういうかたちで、私は少なくとも一種の知的冒険をしてきた、と言いたいわけですね。この本で一番言いたかったのは、私は研究はしなかった、学者ではなかったということかもしれない。けれど、実存的詩人としては、そういうふうに、フーコーからショックを受け、バルトからショックを受け、リオタールに会いに行き、デリダに花を送り……そういうことをやることによって、自分というもの、実存というものを意味のギリギリのところ、しかし意味には回収されない、といって、では無意味でしょうと言われると、そこに意味を超えた激しさがあれば、それが……。だから、一般的な哲学として言っているのではなくて、そういうことをやっていました。(笑)

星野 念のためこれを聞いている方むけに補足しておく、小林先生はこれを理論としてやっているのではなく、完全に実践としてやっている(笑)。行為なんです。学生としても部下としても身近で見ていたのでよく分かるんですが、小林先生はいつも「出来事」を起こさないと気が済まない性だから。

小林 そうです。「小林哲学」というものはないんです。人に言えるような哲学理論をつくりましたということはない。強いて言うなら、出来事を引き起こし、出来事を行為することによって、何かが起こる。何が起こるかは予想がつかない。予想はつかないけど、予想がつかないことが起こることに、括弧付き「意味」がある。意味がないことが起こることに意味がある。それを出来事といきましょう。それだけ。(笑)

星野 ひょっとしたらこの本を誤解して読む方もいらっしゃるかもしれませんが、「自分はこういうすごい人と会ってきたぞ」といったことを書いた本として読むのは全然ちがうわけですね。小林先生が意味を見出したところに「冒険をしましたよ」という本なわけです。知というのは——そこに哲学という主語を入れてもいいのですが——行為であるという小林先生のテーゼは、やはり身をもって間近で見せられるとよく分かるわけですね。

小林 知識じゃないということですね、だから、自分が知識として持っているもので授業をしても仕方ないでしょう。私がそうだったということもあるけど、たとえばリオタール哲学を学んで、その知識がすごく役にたったかという、どうか分からないわけです。なにが私にとっての学びだったかという、リオタール先生が煙草を吹かしながら授業をしていて、誰かが質問すると、そのあいだは「ん？」と笑ったかと思ったら、急に顔が変わって、「カントはね……」と真面目に答え出す。学生の質問の全てを受け止めて、全てに対して自分のフィロソフィアの回答をその場で組立て出す。それに感動したわけです。どんな問いかけに対しても、とりあえず自分も問いかけてみる。そのあり方に感動した。

星野 それは、多少一般化しながら言うと、今だからこそ非常にアクチュアルな問題だと思います。情報や知識はいくらでも転がっている。だから、それをわざわざ教室で教えても意味がない。むしろそういったことは勝手に吸収してもらって、ある行為と、その反応の結果のようなものを見せていかないといけない。そういうことをしていかないと、いま何かを学んだり教えたりする意味はまったくないと感じることが多くなりました。

小林 星野さんは自分をフィロソファーだと思っている？ 私は、星野さんを表象文化論という学科で教えていたので、私自身は表象文化論研究者という顔もできるんだけど、最近は、哲学センター(UTCP)の仕事をやっていたせいもあって、「哲学者」という肩書きが多いんですが。星野さんにとっては、哲学って何かしら？

星野 すごい質問ですね(笑)。最近、哲学とか哲学者という言葉が普通に使われるようになりま

したよね。なにか、社会のなかでの哲学のイメージがすごく変わってきているような気がします。このところ、その意味について考えることが多くなったのですが、いま哲学をより公共的な方向に、まさにこういうダイアログのようなかたちで社会に役立っていこうという、そういう哲学の公共的な使用のようなことが言われています。それは大変けっこうなことだと思いますし、そういうかたちで、哲学が社会のなかであるポジションを占めていくのは基本的にいいことだと思います。ただ、私自身は、やはり哲学とか、このあと話題になる芸術というのは、基本的には少数の人間のものだと思います。

小林 「少数の人間のもの」とは、なかなか刺激的な……

星野 もちろん、公共的な場を作ったり、対話の場を作って人を包摂していくこともおおいにあつたらいいと思うんです。けれど私自身は、それでは救われない人たちというか、そこに包摂されてなるものかという、ある種はみ出してしまおう人たちにに向けてものを書いているという意識があるんです。

小林 それは、社会的にはみ出している、ということじゃなくて？ どういう意味での少数者なのかな？

星野 世界と折り合いがつかない人、でしょうか。

小林 生きづらい人？ そういう感じ？ では、哲学は生きづらい人のためにあるのかな。

星野 それは違うと思います。もちろん、現実的なケアが必要な、本当に生きづらい人たちもたくさんいますよ。そういう人に手を差し伸べることも必要だけど、そこにすら引かからない人だっているわけですよね、きっと。そういう人は決して多くはないと思うんですが、ただやはり、そこに届く回路がないといけないのではないかと思っています。それでさきほどの問いに戻ると、そうした開いていく哲学のあり方と同時に、そうではない、閉じた哲学のあり方を確保したいと思っています。

小林 星野さんが哲学者だとしたら、その哲学者は少数者の「ために」哲学するの？

星野 そうではないですね。

小林 「ために」はまずいでしょね。少数者か多数者かの問題じゃないんじゃない？

星野 そうですね。少数者か多数者かの問題ではない。

小林 じゃあ、その人たちに何をするの？

星野 ただ自分の仕事を見せる、ということでしょうか。

小林 じゃあ、星野さんの仕事の何が本質的？ すみません、授業のようになってしまっているけど。(笑)

星野 普通のことをするだけです。普通に私は、自分が「こういうことについて考えるべきだ」と思っていること、書きたいことがあって、それについてただ書く、それだけです。それはたぶん、ほとんど読まれないと思う。先生の本も……

小林 全然読まれない。

星野 その感覚と同じだと思うんですが、でもそれが届く宛先が、はっきりしないけれどもあるだろうという、その確信はあるじゃないですか。

小林 星野さんがこの本（『《人間》への過激な問いかけ』）にこんなにたくさん付箋を貼ってくれているので、ああ、読んでもらって本当にありがとう、届いているな、という感じがしています。全然答えになってないというか、対話がずれているかもしれないけれども。

私自身はフランスでは哲学の授業に出ていたけれど、日本ではいわゆる哲学科に行ったことはないわけです。哲学をやるっていう気は全然なかった。私自身はどう考えていたかという点と批評がすごく

大事だった。批評と、それから詩的なもの、それからフィロソフィカル。この三つが重なるように基本的には行動してきているわけです。自分がやってきたことをこうやってまとめながら、こいつは何を考えてきたのかと思うと、「批評」というのが決定的に大事なんです。だから私は他のもの、他者の作品について書くことが多い。言われればすぐ書く、という感じ。そのチャレンジを受ける。自分から「〇〇の哲学」を構築するという風には想像力があまり働かない。けれど、「〇〇について書いてくれ」と言われた場合に、まったく見知らぬ呼びかけが世界から届いた時に、それに対してどのような言葉を発するのか、解説するのではなく、知識でもなく、自分がどう対象と一騎打ちできるか——リオタールに迫ると同じなのですが——、そこで何か言葉が発せられる、という感じをずっと持っていました。

どうしてそういうことをするのか、最終的にそれが行き着こうとしているところはどこなのかというと、簡単に言えば、それは「愛すること」。「philosophy」（哲学）という語を「philo-」と「-sophy」に分けて、「知を愛する」というけれど、「知を愛する」ではなくて、知を愛するように、つまり「愛するように知る」ということが「philosophia」だというのが、自分なりの悟りです。だから、「そのものがそのようにある」ということを愛する。というのはどういうことかということ、認めるというか、それだけではなくて——こういう言い方をすると具合が悪い気もするけれど、つい口が滑ってしまうと——、愛することによって初めて起こる肯定というか、相手を肯定する、その存在を、独特な特異な存在を肯定できる、ということなんだ。それは単なるヘーゲル的な意味での承認ではない、ヘーゲル的な承認は相手を愛しているわけでもなんでもなく、社会的に認めているだけじゃないですか。そうではなくて、そこで起こっている生命の出来事が言葉となって出てくる、そのところを私は愛しているという感じ。ちょっと野蛮かな。(笑)

星野 今日もう一回、この本（『《人間》への過激な問いかけ』）を読み返したんですが、バルトについて先生が書いているところがすごくいいなあと思いました。「愛の専門家」ということを言っているんですね。なるほど、ロラン・バルトを「愛の専門家」と呼ぶのか、という驚きがありました。

小林 「常に失敗する」という。(笑)

星野 「常に失敗する」という。そこはすごく面白かったですね。

小林 そういうふうなかたちで、そういうことをやってきたよなあ、という感じはある。あっちにふらふら、こっちにふらふらなんだけど、でも一番取り組んだ領域というか、一番きつかった。出会いがね。

例えばあるアーティストについて書くなら、好きなように書けるというか、私はこう批評しますよ、ということでOKじゃないですか。詩を書くのなら、私はこういう気持ちです、という自己表現でもいいじゃないですか。だけど、相手がいるわけですね。そこにあの人はああいう風に立っている、と。そして、ああいうことを書いている。そこに対して、何か私の存在を通して関わりたい。「関わりたい」という感じ。あなたのお仕事を使わせていただいて、私が日本で宣伝・解説しますから、というのではない。なんか「君にちょっかい出したいんだ」って、そういうのはちょっと愛に似ているでしょう。

星野 そうですね。そのことを、いま改めて言葉で聞かせてもらっていますが、私はそれを長い期間にわたって実践的に教わった気がしています。

今日たまたま持ってきたんですが、われわれの共通の友人である、ブルガリア出身のボヤン・マンチェフという哲学者の邦訳書（『世界の他化——ラディカルな美学のために』法政大学出版局, 2020年）が出ました。このボヤン・マンチェフさんも、フランス語で書いているんですが、小林先生も最初はそういう、ある種の「フランス的なもの」を媒介として彼と出会い、その後、私も出会ったわけです。

でも、その関わり方というのは、彼の哲学を日本に紹介しますよ、というのではなく、対話する相手として、年齢はバラバラで世代も違うんだけど、本当の友人として、哲学の話をするという関わり方でした。そういうことは、小林先生を間近で見なければできなかったと思うのです。それは先生に教わった最も大きなことのひとつだと思っています。

昨日しみじみ考えてみたんですが、私はあまり友達がいないので、過去一年間で誰と一番長くしゃべっていたかなと考えると、たぶんボヤンなんです。彼はブルガリアにいて私は日本にいますが、年に2週間くらいはお互いに行き来しあって、一緒にいる間はずっとしゃべっている。おそらくトータルでいうと、日本にいるどの友人よりも彼としゃべっている。会っていない時にも彼は長いメールを送ってくるので、それに応答したりする。そういう関係を海外の人と曲がりなりにも今こうして持っているというのは、私だけではないと思いますけど、やはり小林先生のおかげだと思っています。小林先生が大学で教えていたことの核心というのは多分そういうことだと思うんですよ。いかに愛するか、ということですね。

小林 「愛する」というのはちょっと言い過ぎかもしれない、「共振する」ということかな。共振すること、それがとても大事。共振するためには、答えを持っている必要はなくて、問かけの仕方を共有できる、というか、問かけることが大事なんです。答えなんて大したことじゃない。答えはそのときどきで変わる。だけど、問えるかどうかが哲学的なんだよ、そうやってしまうと、それはなんでもそうだけれど。結果じゃなくて、問うていく、それが大事。

さっきもいったように、インターネットがあり、ウイルスによる支配もある。ウイルスもインターネットも、私の日常的な意識の中ではまったくコントロール不可能なものだね。インターネットは人間が作り出したシステムだけど、どうなっているのか全然分からない。クラウドってどこにあるんですか？ われわれには分かりませんよね。ウイルスっていうのも、いつも電子顕微鏡の写真メディアで見せられているから、どこかにあることは分かるけど、ここにいるかないかは分からない。つまり私の意識にはまったく働きかけてこない。それに支配された、われわれは。それと接合している。そこに、《人間》をもう一度問わなければならない大きな理由、時代的な理由がある。だけど、それに対してどこかにボンと正解があるわけではない。人間がそうした条件のもとで、これからどういう風に人間であることを引き受けるのか、その問いのかたちが大事なわけですね。その問いから決して性急に答えが出てはいけない。たったひとつのことを問うためにも、膨大な時間がかかる。その問い方も色々な問い方があるわけだし。でも、問かけることができるか、ということは、自分というものについてもそうかもしれない。「私」というものですら、はっきりしているのは、「私」は私が知っている「私」ではない、ということだけだよ。ひょっとしたら、誰かと共振しなければ、「私」が誰であるのかは分からないのかもしれない。

星野 いま、小林先生は問いを投げる側としておっしゃいましたが、問いを受け取る側からすると、問いというのは不意にやってくる暴力的なもので、問いをひとたび受け取ってしまうと、そこから何か思考が始まるという、そういうところがあると思うんです。今日最後に話そうといていた、お互いにとってすごく重要な芸術というものも、そういう問いとして現れてくると私は思っています。われわれはべつに、何か良いものを見るために美術館に行くわけではない。そこである問いというか、そこに何か残ってしまうような、もしくは時に暴力的なかたちでこちらの思考に棲みついてしまうような、そういうものに触れたいからこそ関わっているんだと思います。

小林 だけど、問題はその問いが、言語としては明確じゃない、ということだよ。今日、アートについては、星野さんがちょうど、内藤礼さんの個展のカatalogに執筆したところだし、私の方は来

年の国立国際美術館の、わたしの友人のミケル・バルセロの展覧会のことを語ろうと思っていました。

内藤礼さんのケースでもそうだけど、内藤さんは「こういう問いがありますよ」と言ってそれを表現しているわけではない。「問い」は見えない。だけど、たとえばわれわれがある絵を見て、「綺麗だ」とか「美しい」とか感動して揺さぶられた時には、それが意味ではひとつの問いかけだよ。なぜ自分は揺さぶられているのか分からないんだから。分かたらおかしいわけでしょう。何か分からない未知のものに出会っているような、今まで一度も見たことがないものに出会っているような、それで自分の心が揺れているような、でもこの、揺れている「私」って何？ という感覚。だから、「綺麗なものを見て感動した」「美味しいものを食べて感動した」、それで済ませられればそこには問いはないわけ。だけど、特に現代のアートの場合がそうだけど、かならず問いが残るよね。

内藤礼さんの展覧会の場合はどうですか。

星野 コロナウイルスの影響で会期が短くなりましたが、今年の6月から8月まで、金沢21世紀美術館で内藤礼さんの「うつしあう創造」という個展があって、そのカタログに文章を書かせてもらいました。

内藤さんの作品は、ご存じの方も多と思うんですが、非常に繊細で小さい。人型のこともあれば、ビニール紐が一本ただぶら下がっているだけということもある、そういう作品です。これまでに都内のギャラリーで見ていて、何年か前の水戸美術館での個展も見ていますので、もちろんある程度は知っていたんですが、今回の金沢の個展は、すごく天井が高くて広い空間に、本当にもう見えるか見えないかくらいの極小の MATERIAL がちりばめられているという、そういう個展でした。そのカタログの私の文章は、展示を見たうえで「人間」ということをひとつテーマにしている、タイトルが「わたしたちはいまだ十分に人間ではない」というものです。内藤さんの作品にも元々「人間」というテーマがあるのですが、もちろんそれを直接的に問いとして投げかけているわけではありません。たんに私が「人間とは何か」という問いを受け取ってしまった。それにはおそらく、いくつかの理由があると思います。

空間中にすごく繊細な作品がある。ふだん私たちは、ある一定のサイズをもった絵画や立体を、距離をつめたり距離をとったりして見ているわけですが、内藤さんの作品と同じ空間にいと、自分の身体スケールがよく分からなくなってくる。そういう意味で、自分がそれまで自明視していた身体性とか所作について考えざるをえなくなってくる。それこそ、その辺りに作品があるかもしれないから、そこは慎重に歩いていこう、とか。そういうことを含めて、やはり「人間」とは何であったか、ということを考えざるをえない。そういう体験でした。今回の小林先生との対話もたまたま「人間」がテーマでしたけど、内藤さんの個展のカタログに書いた文章でも同じように、「人間」をめぐって考えることになりました。

小林 星野さんにとって、今回の内藤礼さんの展覧会でも、あるいは豊島の作品でもいいんだけど、そこから引き出されてくる「哲学的問い」って何ですか？

星野 そうですね。内藤さん自身も文章を書かれる方なので、それに引きずられている部分もあるかもしれませんが、すごく単純に「自分は人間なのか」ということでしょうか。

小林 私は金沢の展覧会は見えていないけど、キュレーターの方がカタログを送ってくださって、内藤礼さんの文章を読んで、星野さんの文章も読んだ。私が一番星野さんに聞きたいのは、「どうしてあの人型について触れないの？」ということかな。あなたはクリップについて、床に落っこちていたクリップについてえんえんと書いているけど、私は「星野さん、ここを外したな」と思った。見えないから分からないけれど、あの展覧会で特徴的だったのは小さい人型が出てくるところでしょうか？

分からないけど女性的な人型、童女、あれが並んでいる。そこで、それを見る、だけど内藤礼さんの文章を読むと、それが向こうから見返してくる。この視線の相互性があの展覧会にとっては非常に重要だということが示唆されているのに、「星野さん、逃げたな」という感じ。一番肝心なところを分かっ
ていながら、「クリップ」で逃げた、という感じを持ったんだけど、どうかしら？

星野 さきほど小林先生が、批評を自分の中心に据えてきたとおっしゃいましたが、それは私もそうで、やはり「人間とは何か」ということについて書いているときにあの人型について触れたら、それはあまりにも当たり前すぎるだろうと。

小林 なるほどね。

星野 あれが人型であって、小さい人がこちらを見ているということは作家の内藤さん自身も書いていらっしやることだし、やはりあれだけたくさんの人型があったら当然そこに眼がいくわけですよ。それについて書いたら、あまりにも当たり前すぎる。そういう判断でした。

小林 批評的戦略だった、それで「クリップ」にした、と。

星野 そうです。クリップが落ちていたんですよ、その会場に。初日ですから、ほとんど人が入っていない空間に小さいクリップが落ちていて、明らかにそれは前日の内覧会で誰かが落としたものなんでしょうけど、でも私はそれに出会ってしまった。出会ってしまって、私はそこに一日中いたんですが、誰もそのクリップに気付かない、誰も「落ちていますよ」と言った形跡はなかった。だから、私しか出会ってない。だけど、当然、いつか誰かがそれをみつけて捨てますよね。だから私は、あの時出会ったクリップともう絶対に会うことはない。

小林 まあ、そこで禅マスターになったように突っ込むなら、「クリップは君を見ているかね？」と、こうなるね。つまり、相互性が問題なので、クリップは見たか。どう？ 君を見た？

星野 うーん……。

小林 内藤礼さんの展覧会のカタログの図版をみると、非常に広いスペースに小さい人型がある——他にも仕掛けは色々あって、それだけに還元はできないんだけど——、同じひとつの空間の中では普通は絶対に見ることのない小さな人型がある、そこに人がいるということで見わけです。人だから、こちらは見るわけ。だけど、「見る」ということからすると、何ていうか、この距離じゃないよねっていう感覚にとらわれてしまう。現代のアートは、何か、われわれが普通に考えている空間とは違う空間を提出してくる。色々な人間の「私」が今ここにいるっていうこと、私が今ここに、この三次元空間の中にいるということをまったく超えた空間経験がここにはありますよ、空間はあなたが考えているようなものではないんですよ、空間を通して何かが起こりますよ——まあ、何も起こらないんだけど——という感覚みたいなもの。内藤さんの場合には、非常に具体的な空間を通して、具体的ではないもうひとつの空間というか、もうひとつの想像的な空間の中にわれわれは生きていて、そこに人としての生き方のベースがあるよね、というふうに哲学的に言えば解釈できる展示をなさっているんじゃないか、と思うんですよ。もちろん、他にもいっぱい色々な要素はありますけど。

それにつけるためには、と考えた時に、たまたま来年の3月に大阪の国立国際美術館で私の友人のミケル・バルセロというスペイン人の展覧会が日本で初めて行われるんです。彼は完全にペインターで、絵を描く人です。今ここに、私が書いた『ミケル・バルセロの世界——形という生命／物質と暴力』（未来社、2013年）という本をもってきたのですが、この本のカバーを広げてお見せしますので、ごらん下さい。こういう動物の絵、これは洞窟絵画につながるような描き方になっています。私自身の肖像画も実は描いてくれていまして、これがそうです。これは東日本大震災の直後にパリにいった時に描いてもらったものです。ジャベル水で描かれています。黒白が反転しています。真っ黒なとこ

ろにジャベル水で描くと脱色される。つまり「現像」なんですね。こういう風に、暗い洞窟の闇から、絵が、像が出てくる。これは、つまりラスコーとか、ショヴェとか、アルタミラとか、そういう太古の時代の画家なんですね。だから私は、この論考のタイトルを「最初の画家」(first painter)としました。そういう人が描くわけだから、やっぱり人間のことは全然描かない。人間は全然出てこなくて、動物がたくさん出てくる。蝸が出てきたり、豹が出てきたり。真っ暗な洞窟の中で、しかしある時、そこには物理的には何もないにもかかわらず、ちょうど情報が入ってきたかのように、一人の画家が突然、壁に動物を描く。その動物の絵が、まさに単に動物を写メしましたというのでは全然なくて、生きているというか、命そのもののように見える。決して像を、写真をとっているわけではない。そこに何か出現してくる。その出現というのは、ミケルの場合は、非常にシャーマニズム的な、古い古いタイプの、人間にとっての最古のイメージの現出という問題とつながっている。でも内藤礼さんの場合は、非常に現代的ともいえる、現実の空間の中にスケールの非常に違う小さな人型なんだけれど、それがどう言ったらいいか、それを見る「私」、それから見られる「私」、というところに私がいることを考えさせる。この二人は何かこう、対極にいるような感じがする。最初の画家と現代のアーティスト、この間にはアートが人類史の中で経てきた長い長い歴史があるわけだけれど、それは常に、どこか今じゃない時空と接続した時に、何かが一瞬と降りてくるというその感覚が、さっき言ったように、人間がこの空間、距離が測れる空間の中でのものを見ているんじゃないかと、われわれのまなざしそのものを、ひょっとしたら、何のテクノロジーをも介することなく、色々なものに接続させることができるんだ、ということを示唆している、ということなんじゃないだろうか。そういう、もうひとつの「人間への問いかけ」みたいなものがあるんじゃないかな、という感じです。

星野 よくわかります。こういう話は、ともすると非常に霊的なというか、スピリチュアルなものだと捉えられかねないですけどね。でも、すごくよくわかります。

小林 スピリチュアルなものというのは今、色々な仕方で行われているけど、私はやっぱり、その中にはある真実があると思う。その中には、この近代的な理性によって打ち立てられた世界理解が押しつぶしてきた、非常に古い、古代からの、まだ人間が持っている可能性みたいなものがあって、そこまで含めて、もう一度、「人間とは何か」を問い直さなければいけない時に来ているんじゃないかなと私は思っています。

対話者について――

小林康夫(こばやしやすお) 1950年生まれ。東京大学名誉教授。専攻＝哲学、フランス文学。小社刊行の主な著書には、[『《人間》への過激な問いかけ――煉獄のフランス現代哲学\(上\)』](#)、[『不可能なものへの権利』](#)、主な訳書には、ジャン＝フランソワ・リオタール『ポスト・モダンの条件』、主宰する雑誌には、[『午前四時のブルー』](#)(責任編集)などがある。

星野太(ほしのふとし) 1983年生まれ。早稲田大学専任講師。専攻＝哲学、表象文化論。主な著書、訳書には、[『崇高の修辞学』](#)(月曜社、2017年)、カンタン・メイヤー『有限性の後で――偶然の必然性についての試論』(共訳、人文書院、2016年)、小社刊行の論文に、「アペイロンと海賊――『雲』をめぐる断章」(『午前四時のブルー I 謎、それは自分』)がある。